Ⅵ 戦時下の千演

さきの大戦は，日中十五年戦争ともいわれる。１９３１／Ｓ６年９月の満洲事変ごろから往復文書綴にも，『新聞雑誌等ニ奉掲ノ御影ニ関スル件』CS6/03/31，『関東防空演習實施ニ関スル件』CS8/06/30[H71]，『天皇機關説』芟除の通牒 CS10/10/22 などがファイルされており，つぎの時代の前触れを思わせる。

１９３７年７月の蘆溝橋事件をきっかけに，十五年戦争は日華事変の段階にはいる。わが国の政治，経済，社会の戦時体制化は，同年８月に閣議決定の『國民精神總動員実施要綱』 CS12/10/06 などにより始まり，翌１９３８年３月に議会通過の『國家總動員法』などによって加速された。この年，官庁の暑中半休が廃止されたCS14/07/14。翌１９３９年は『紀元二千六百年』の前年にあたるが，國民精神總動員委員會は『公私生活を刷新し戦時態勢化するの基本方策』を決定，個人主義的，自由主義的生活態度を排し，国民的，奉公的生活態度の強化を図った CS14/08/01。この年９月から，毎月１日が『興亜奉公日』に定められ，具体的な実施行事内容を本演に報告するようになるCS14/09/18[C164]。１９４１年１２月，日中戦争は太平洋戦争（大東亜戦争）に拡大，戦時体制化はさらに強力に進められ，『興亜奉公日』は毎月８日の『大詔奉戴日』に替わった。

日華事変勃発の翌８月には『在支陸海軍軍人軍屬など慰問のための據金』の俸給からの徴収が始まりCS12/08/14，同年暮れの賞与では国債の購入が割り当てられたCS12/12/10。以後，種々の名目での献金や貯蓄の，職員への強制が敗戦まで続いた。

日華事変とともに，石油製品，金属類を初めとして，各種の物資が不足してくる。しばしば『物資活用竝に消費節約』に関する通牒があり，自由経済から統制経済への移行が始まる。この時代から敗戦後にかけての往復文書綴は，いろいろな品目についての需要調査，配給申請，配給割当などの書類でいっぱいである。

戦争の進行とともに物資の不足は深刻になる。１９３８年の『金強制買い上げ』は外貨不足対策であったがCS13/03/06，その後の『官廳金屬類特別回収』CS17/12/31，『纖維製品供出』CS19/07/14[H330]，『銀ノ回収』CS19/11/14，『アルミニウム根コソギ動員』CS19/12/03などなどは，軍需品生産の原料として，直接役立たせようとするものであった。

軍隊への召集や，軍需工場への徴用にともない，慢性的な人手不足となる。千演の人員は，昭和一桁の不況時代より増えたが，配給物資受給の手続きや，食料など不足物資の調達，自給生産など，平時には考えられない業務に労力をさかれた。さらに大戦末期になると，軍需用材の緊急伐採などで，本来の森林管理業務に充分な人手が回らない状況となった。

以上のような政治，経済，社会の戦時体制化は，千演における研究，教育，森林管理などに多くの影響をあたえたが，それらについては，これまでの各節で断片的に触れた。ここでは戦争末期の千演でみられた，以下の事項につき述べる。

１９４３年４月清澄で【Ⅵ－１　演習林五十周年記念式典】が開かれ，それは帝国大学演習林，最後の祝典となった。つぎの【Ⅵ－２　南方林業要員錬成所，南方開拓技術員養成所】は，同年５月清澄に開所し，名称を変えて敗戦近くまで続いた訓練施設である。１９４５年，敗戦の年の春から夏にかけ，【Ⅵ－３　君津農林学校報国隊】が千演に動員された。また【Ⅵ－４　陸軍部隊の駐留】は，同年，九十九里防衛隊の一小部隊が一時期，札郷寄宿舎に宿泊した記録である。

Ⅵ－１　演習林五十周年記念式典

（１）はじめに

演習林創設五十周年の記念行事についての全般的な資料は，千演本演とも見当たらない。Ｎ（中村賢太郎教授）メモによれば，記念祝賀式は１９４３／Ｓ１８年４月１８日午後１時半，千葉演習林清澄寄宿舎の食堂で開会，式典に続いて立食形式の祝賀会があり，午後３時４５分閉会している。戦時下，簡素な内容であったと思われる。

（２）参加者

参加者数，氏名などの記録は見当たらないが，芳名録などから判明の参加者氏名を，卒業年，職名とともに表３９にしめす。

千演創設時代からの林学関係者の名前がみられる。海軍省経理局主計将校一行の参加は，奇異な感じがするが，この時期，札郷方面の２５，２６，２７林班で，海軍軍需用材の払い下げが行われていた[ES18]。軍の一行は，前日厳（岩）根（木更津）の第二海軍航空廠を視察，同夜は清澄宿舎泊，１８日の祝賀式後，ただちに下山，帰京している[HS18]。軍経理関係者を招待することで，諸物資欠乏の戦時下での行事に，多少の便宜が図られたと想像される。

地元関係の出席者としては，前年の招待予定者検討資料から，以下の人々が考えられる。千葉県林務課長，地方事務所長，千葉県森林組合聯合会，千葉県木材株式会社社長，天津町長，亀山村長，鴨川警察署長，警防団長（天津，亀山），国民学校長（天津，清澄，亀山第一，亀山第二，亀山第三），清澄寺住職，清澄寺檀徒総代[CS17]。

表３９　五十周年式典参加者（一部）

氏　名		卒業年		職　名
本多	静六	M23		農・林・名誉教授
佐藤	鋠五郎	M25		大日本山林会長, 元山林局林業課長
白澤	保美	M27		元林試場長
右田	半四郎	M27		農・林・名誉教授, 元演習林長
林	常夫	M39		北海道林務技術監
藤岡	光長	M42		農・林・教授
吉田	正男	T７		農・林・教授
中村	賢太郎	T９		農・林・教授
嶺	一三	S２		農・林・助教授
猪熊	泰三	S３		農・林・助教授
荻原	貞夫	S５		農・林・助教授
鏑木	外岐雄	T４	理*	農・動物・教授
町田	次郎	M44	農	農・動物・助教授
依田	貞種	M39	実	日本木材協会理事
深田	雅治	M40	盛	大日本山林会
井出	正孝	T11	法	山林局長
須田				東京営林局長
武井	大助	海軍省経理局長		主計中将
森島	種雄	同局		主計小将
宮本	正光	同局		主計大佐
鈴木	總一郎	同局		嘱託

* 理：理学部，農：農学科，実：林学実科，盛：盛岡高農，法：法学部

（３）記念版概要，記念品

五十周年の準備は，数年前に始まっていたと思われる。『演習林概要（創立五十周年記念版）』の発行は１９４３／Ｓ１８年３月２５日付けで，千演分原稿を，高原助教授が林学科島田教授宛に送ったのは前年８月末であった[CS17/08/31]。当時の出版事情から，編集の時間的余裕は，あまりなかったと思われる。

各地方演は，式典参加者へ配布する記念品を，各 150個を目安に製作した。樺太[CS18/03/16]，愛知[CS18/01/08]，朝鮮全羅南道[CS18/02/23]，朝鮮江原道[CS/17/12/19]の各演習林からは直接，千演に記念品が送付されてきた。全演からは漆塗盆がきたが，裏に演習林名の焼印を捺すつもりのところ，調達困難なので本演で配慮をとの添え書きがあった。他の演習林の品物の内容は不明であるが，すでに輸送事情が悪く，時間がかかるうえ破損するものが多かった。

上記以外の地方演習林分は，本演経由で千演に到着，熱帯林業研究所（海南島）の記念品は水牛製品であった[CS18/02/10]。

『概要』と『記念品』は，式典参加者に配布された。なお『概要』は後日，本演から表40のように送付されている[HS18/08/17]。

表40　五十周年記念演習林概要配布先

氏　名	卒業年	職　名
三浦　常雄	M36　実*	元北演主任
薗部　一郎	M38	農・林・名誉教授，元千演主任，演習林長
西川　末三	M38　実	元台演主任
高嶋　規孝	M42	水戸高等学校長，元千演主任
牧　俊夫	T5	奉天農大教授，元秩演，千演主任
新妻　蕃郎	T9　実	元江演主任
望月　岑	T10	東京高農教授，元台演，秩演主任
諸戸　北郎	M31	農・林・名誉教授
藤井　眞一	S16/2	砂防学教室助手
小出　滿二	M39　農	東京高農校長
鈴木　秀雄	T7	東京高農教授
中塚　友一郎	S12	東京高農教授
中島　廣吉	T2　北	北大農・教授
長澤　武雄	T3　実	九大農学部
早尾　丑麿	M44	農林省山林局
小林　準一郎	M43	王子製紙山林部長
村上富士太郎		日本木材株式会社
香坂　昌康		全国治山治水協会
学内：総長，庶務課長，学生課長，営繕課長など		
地方演：北演：50部，台演：30部，江演：20部，全演：20部，樺演：20部，秩演：10部，愛演：15部，熱研：15部，樹研：10部		

*実：林学実科，農：農学科，北：北大林

（4）参加者のメモ，感想

千演の創設にかかわった，本多静六名誉教授には，中村賢太郎教授が同行した。Nメモによれば日程は以下のようである。

4月17日（土）小雨のち回復，風あり

09:04 両国駅発，吉田林長，本多，右田両先生ほか，乗客少ない方

12:28 安房天津駅で一行の大部分下車

12:35 安房鴨川駅着，本多先生と吉田屋へ，昼食天ぷらそば

13:00-15:45 東条村防潮林など視察
17:06 山林局長ら安房鴨川駅着
18:30-20:00 会食（18名）
　4月18日（日）快晴，暖，無風
07:30-08:30 魚見塚及び汐止国有林視察
08:30 自動車3台（本演，千演，借上車）で清澄へ，南沢，世界爺，清澄寺を経由
11:30 清澄着
13:30-15:45 宿舎食堂で式典，立食祝賀会
16:40 自動車で海軍省一行を安房天津駅へ見送り後，鴨川へ
19:30-21:30 会食（18名）
　4月19日（月）雨
08:15 鴨川発，自動車で天津へ
10:36 安房天津駅発，帰京

式典参加の感慨を，白澤保美（梓西學［山］人）は漢詩に[2]，依田貞種（秋圃）は短歌に[3]まとめた（原文はいずれも縦書き）。

参列清澄演習林創設五十年祝賀式述所感

梓西學人

其一

五十年前此地遊　雜然樹木挟清流
星移物換林容改　黒髪書生亦白頭

其二

濶針樹混碧渓深　始定皇邦演習林
一萬學徒修技去　年々尽届到于今

其三

詣松野先生記念碑

外來樹木萬重中　碑字長留勸學功
石黙蒼苔林愈茂　先生遺業與年崇

（尽届 シュウチュウ:前の人につらなって歩む）

清澄山演習林

依田秋圃

四月十八日，帝大演習林五十周年記念式を千葉県清澄山演習林に挙行さる。之に参列す。天気晴朗，さくらさかりなり。

うららなる安房の外うみ群れてゆく
船のけむりを指して語らふ

この山に植ゑし春よりめぐしくも
早や四十年を木々はふとりぬ

杉の根に著莪の花さき山みちは
在りしままにて年を経にけり

（5）おわりに

五十周年（満50年）には1年以上も早い，１９４３年4月１８日が式典日に，えらばれた理由は明らかでない。戦争の前途に厳しさを感じ早められたのか，あるいは次節に述べる『南方林業要員錬成所』の開設まえにということで繰り上げられただけなのか，種々想像される。

すでに前年の１９４２年6月，日本海軍はミッドウェー海戦に大敗していた。翌１９４３年2月，ガダルカナル島から退却，式典当日の4月１８日には，連合艦隊司令長官山本五十六戦死，5月，アッツ島守備隊全滅と続き，日ましに敗色が濃くなる。額面どおりの五十周年は１９４４年末で，すでに式典どころではなかった。理由はどうあれ，繰り上げは先見の明といえようか。

この時代，演習林長から農学部長となった三浦伊八郎教授が中心になって，林産関係講座の増設や，南方自然科学研究所の設置を実現した[1]。当時，東大演習林の総面積は，142 千ha余，これに発足間もない熱研（海南島演習林）をくわえると，225 千haにも達した。それでもなお，南方へ拡張をとの空気があったようである。

１９４３年5月には清澄に，『南方林業要員錬成所』が開所。また同年8月～１０月には，吉田演習林長が南方占領地域を視察した。かねて計画中の南方演習林設立準備のためであった。

五十周年式典は，帝国大学演習林としての多分最初で，最後の祝典行事となった。

引用文献

1) 三浦伊八郎(1971): 林学科講座の変遷，In: 大正・昭和林業逸史（上）,p.6-11,（林業経済研究所編），561p.,日刊林業新聞社，東京
2) 梓西學人(1943): 參列清澄演習林創設五十周年祝賀式述所感，山林 **728**:23
3) 依田福三編(1985): 依田秋圃全歌集，483p., 短歌新聞社，東京

Ⅵ－2　南方林業要員錬成所，南方開拓技術員養成所

（1）はじめに

太平洋戦争のさなか１９４３／Ｓ１８年春に『南方林業要員錬成所』（略称『南林』）が清澄に設置された。南方占領地の森林資源開発要員の養成が目的で，性格的には田無農場に設置された『熱帯農業員養成所』に似ていると思われる。その後，南林は『南方開拓技術員養成所』（略称『南拓』）に引き継がれ，１９４５年の敗戦間近まで続き，修了者は計 170余名に達した。

しかし，『南林，南拓』に関する公式の記録は，千演にも本演にも見当たらない。こうした状況は，上記の『熱帯農業員養成所』でも同じとみえる。東京大学百年史所載の同養成所概要[4]は，主として内田文書（内田総長保管の資料）と帝国大学新聞にもとづくという。

また，関係者による熱帯農業員養成所の回顧談[5]は，農学部の収集による。このなかの荻原貞夫名誉教授（元林学第四講座担任，元演習林長）の談話に『南方要員錬成所』，『千葉の演習林』などの名称がでてくるが，『熱帯農業員養成所』との区別が，理解しにくい編集になっている。

『熱帯農業員養成所』として１９４３年，農場に新設された建物は，のち『田無学寮』として１９８８／Ｓ６３年３月末の廃止まで機能し，その前身が多数の人の記憶に残された[6]。これにくらべ『南林，南拓』は，大学としての関与，規模，所在地など，条件のちがいもあり，かつての存在が，より早く忘れられたようである。

ここでは，若干の文献と資料にもとづき，その輪郭を記述する。

（2）南方林業要員錬成所

『南林』の運営主体は，帝国森林会であった。同会の会史[1]などにより，その概要を以下にたどる。

１９４３／Ｓ１８年２月，大東亜省，東京帝国大学農学部などが帝国森林会へ，南方林業要員錬成所事業の実施を勧奨した。目的は，南方占領地域における豊富な森林資源の開発利用にあたる人材の養成にあった。当時，すでに戦況の切迫した太平洋戦争を有利に進めるため，木材の現地調達が重要と考えられた。

２月２７日，帝国森林会は理事監事会の承認をえて，『南林』事業実施を決定。大東亜省，海軍省，東京帝国大学農学部などの後援のもと，本部は帝国森林会内，訓練所は千葉県演習林清澄とした。講師には東大林学科の教官を中心に，南方関係の学識経験者をあてた。

３月，つぎのような南方林業要員募集要綱が発表された[8]（原文は縦書き）。

一，目的：現戰時下大東亜共榮圏確立ノ為ニハ南方諸地域ニ於ケル豐富ナル森林資源ヲ急速且有効ニ開發スルコト緊要ニシテ之ガ為ニハ熱帯林業ヲ習得セル林業技術者ヲ南方ニ進出セシムルコト焦眉ノ急務ナリ，仍ッテ本會ハ南方林業要員錬成所ヲ設置シ以テ南方諸地域ノ拓殖ニ必要ナル人格ト實力ヲ有スル中堅人物ヲ養成セムトス

二，錬成修了者ノ配置：錬成修了者ハ大東亜省斡旋ノ下ニ南方ニ於ケル農林關係事業ニ従事セシム

三，入所志願者ノ資格：滿十七歳以上滿二十五歳未滿ノ未婚男子（但シ本年徴兵適齢者ヲ除ク）ニシテ中等實業学校（農業科，林業科，園藝科）卒業又ハ之ニ準ズベキ学歴及經驗ヲ有スル者

四，募集人員：本年度豫定人員五十名

五，錬成方法：錬成期間ハ十ヶ月トシ，全員ヲ寄宿舎ニ収容シ授業，實習ヲ受ケシムルノ外，輔導ト起居ヲ共ニシ，師弟一體實践窮行以ッテ南方林業技術者トシテ必要ナル専門的知識技能ノ修得，精神鍛錬，人格陶治及身體練磨等ニ萬全ヲ期スルモノトス

六，錬成課目：

(イ) 國體ノ本義；國體理念，皇國史

(ロ) 大東亜建設理念

(ハ) 南方事情；地政，歴史，産業經濟

(ニ) 熱帯衛生

(ホ) 林業科目；林學通論，熱帯林業通論，熱帯樹木，熱帯土壌，熱帯昆蟲，熱帯植物病理，造林學，熱帯樹藝，熱帯林産物加工製造，熱帯林産物収穫，氣象及理水，測量，測樹，熱帯農林業經營，熱帯農産，熱帯畜産，熱帯水産，熱帯農業土木，熱帯栽培汎論，造林實習，熱帯樹藝實習，熱帯林産加工製造實習，測量實習，測樹實習，

林産物採集實習

(へ) 語學；マライ語其他

(ト) 特別講義

(チ) 武道，體操

七，錬成費：錬成員ノ訓錬被服寝具ハ貸與シ，食費及授業料ハ徴集セズ

八，應募手續：（略，なお願書の送付先は東京市赤坂區葵町，大東亜省内南方林業要員募集事務所であった。）

九，入所志願者ノ銓衡：試験銓衡ヲ行フ者ニハ銓衡ノ日時及場所ヲ四月三十日迄志願者ニ通知ス

銓衡ハ筆答口頭試問及體格検査ニヨリ之ヲ行ヒ，入所許可ハ五月二十日迄ニ通知ス

５月３０日，千演清澄で『南林』の開所式と第一期訓錬生の入所式が行われた[10)]。列席者は，大東亜省島津錬成課長，東大吉田演習林長，農林省大木事務官，千葉県織田経済部長，その他官民関係者百数十名を数えたという。式典では，所長本多静六博士の式辞（『山林』誌[10)]に全文掲載），大東亜大臣の告辞，吉田正男林長の訓辞，山林局長，千葉県知事，東大農学部長，大東亜林材協会会頭，天津町長ら来賓の祝辞，入所訓錬生代表上田新三の宣誓などがあった。

同年１０月２９日，南林第一期生38名錬成修了，清澄での修了式後，大東亜省に出頭した。この月，学生の徴兵猶予制度停止，翌１１月タラワ島日本軍守備隊全滅，翌１９４４年2月トラック島海軍基地空襲により壊滅と，戦況は悪くなるいっぽうであった。

こうした状況下，南林修了者は同年末から翌１９４４／Ｓ１９年初めにかけ，ボルネオなどの任地に向け渡航した。しかし，乗船が雷撃を受け沈没したり，着任後ほどなく現地で戦闘に参加するなどして，この期の戦死者は16名にも達した。

１９４４年1月１５日，第二期訓錬生が入所。坂田による東北地方，高原らによる九州地方での入所者募集活動の効果もあってか，前年１０月末の締切時には定員の3倍の応募者があったという[11)]。１１月１７日，２０日の両日，札幌，仙台，東京，長野，大阪，高松，広島，熊本の８箇所で一斉に銓衡試験が行われた[12)]。入所式には，薗部一郎（東大名誉教授，海軍司政長官），小田　脩（大東亜省囑託），三浦伊八郎（東大農学部長），宮田長次郎・鈴木清次・大田　武（以上，帝国森林会），仁瓶平二（南方農林協会），中村與助（地方事務所），藤岡光長（林試場長），清水孝平（大東亜省），井本米藏（大日本木材協会），吉田正男，永田龍之助らが列席した（千演芳名録などによる）。

６月３０日，南林第二期生48名錬成修了。修了式には，三浦伊八郎，吉田正男，新山　清（本演），松原英三，田邊隆次，橋本秀久（大日本山林会），高島大蔵，藤岡光長，植松　健，宮田長次郎，鈴木清次らが列席した（千演芳名録などによる）。

この月，ヨーロッパでは連合軍がノルマンディに上陸，翌７月サイパン島日本軍守備隊全滅。こうした不利な戦況下，第二期生の多数が南方の任地へ赴任した。半数近くは，海軍軍需部第６１海軍糧食生産隊に所属，セラム島，アンボン島に配置され，直接戦闘にまきこまれることは少なかった。渡航に護送船団が利用されたこともあって，この期の戦死者が2名ですんだのは，幸運に恵まれたというほかはない。

第二期生の修了をもって，『南林』は廃止された。同年３月１８日の帝国森林会理事監事会の決定にもとづく。戦況の緊迫で，錬成修了生を当初の目的に役立てる見込みが少なく，事業の意義に疑問がもたれた。青少年人材を，ほかに役立てるべきとの意見が強くなったためである[1]。

（３）南方開拓技術員養成所

上記の理由で１９４４年６月末をもって，『南林』は廃止となったが，海軍省関係では，なお事業継続の意向があった。そこで，帝国森林会に代わり，青年文化協会が主体となって事業を引き継ぎ，『南拓』を設立した。

『青年文化協会』[2]は１９３９／Ｓ１４年９月創立，１９４０年１０月２６日財団法人認可，会長八田嘉明，理事長河原春作。協会の目的は，内外学徒の指導啓発により東洋文化圏の拡充をはかることで，以下の事業を計画した。

１．外国，主として東洋および東南アジア留学生に対する教育施設の設置経営

２．本邦青少年に対する東洋文化思想の普及及び所要の訓練

３．学者，学生其の他の者の交流

４．其の他理事会に於て目的達成上適当と認めたる事業

１９４４年１０月１０日，清澄で『南拓』の開所式と第一期訓錬生の入所式が行われた。列席者は八田嘉明，秋葉主事ほか青年文化協会関係者，鳥居源二（大東亜省錬成課），藤岡（海軍航空本部経理課長），三浦伊八郎，吉田正男らであった（千演芳名録などによる）。この月，米軍レイテに上陸，海軍特別攻撃隊の初出撃があった。

１９４５年３月１５日，第一期短期生35名が，同月２５日，同長期生31名が，それぞれ錬成を修了し，海軍省南方政務部へ出頭した。いずれも海軍軍属（製糧士）として，海軍第一衣糧廠，茨城県百里原海軍航空隊基地などへ赴任した[7]。この年米軍は，２月に硫黄島，４月に沖縄に上陸，なお３月には東京大空襲があった。

１９４５年4月１２日，第二期訓錬生入所，同年５月１０日，錬成修了。海軍第一衣糧廠，呉海軍軍需部などへ赴任[7]。以前にくらべ，いちじるしい速成であるうえに，研修内容が期待はずれということで，一時期，訓錬生の不満が大きかったようである。この月，ドイツは連合国に無条件降伏，同６月，日本軍沖縄本島守備隊全滅，敗戦は間近であった。

『南拓』については，運営主体の青年文化協会関係の資料検索が不充分なため，不明な点が多い。

（４）教官，講師，講義

南林，南拓とも，専任の教官による授業のほか，東京方面からの非常勤講師による集中講義が，つぎつぎ行われた。専任の教官は以下のようである[7]。

『南林』

所長：　本多静六（帝国森林会会長）

隊長：　三浦伊八郎（東大農学部長）

教官：　日出平　昇（錬成主任），坂田太市（北演職員）

嘱託：　佐藤　修（千演職員）

補助教官：豊田久承，芝崎茂精（南林第一期生）

錬成主任，日出平　昇（１９３３本科卒，陸軍大尉）は，農商務省からの割愛人事によるもので[1]，南林廃止後しばらくの期間，助教授として東大農学部に在任した（１９４４年１２月～１９４６年１２月)。

『南拓』

所長：　吉田正男（東大演習林長）

副所長：　高原末基（千演林長）

教官：　佐藤　修（千演職員），西林敏彦

事務長：　杉山一朗（元天津町助役）

舎監：　栗山圓次（元君津農林校長）

補助教官：今井武雄（千演職員），岡田國松（興農文化園，青年文化協会），佐伯慶一（青年文化協会），飯塚鐐二（南林第二期生），峯　泰夫（同左），田口義夫（同左），近藤（渡邊）　盛（同左）

『南林』の授業課目については，いくつかの参考資料がある[1,7,8]。それにくらべ，『南拓』の資料はとぼしい[7]。ここでは，それらに千演芳名録への記載などをくわえて，表４１をまとめた。

表4 1　南林，南拓の授業課目と講師

課目	講師	所属など	講義期間　月／日 南林Ⅰ期 (1943)	 南林Ⅱ期 (1944)	 南拓Ⅰ期 (1944/45)
南方遍歴所見	薗部一郎	東大名誉教授	06/？		
南洋群島事情	杉浦庸一イ)	林試技師		05/27-29	
南方産業経済	島田錦藏	東大農・林			10/15-
南方の歴史	豊田久二	法大，海軍省嘱託，青年文化協会理事			
熱帯における列国の植民地政策	中山正章	東大農・演		06/16-	11/09-10
熱帯有用樹木	猪熊泰三	東大農・林	08/02-13	05/11-19	02/14-17 10/27-30
測樹学	嶺　一三	東大農・林	06/30-07/10		03/09-15
測量学	荻原貞夫	東大農・林	06/10-20		
気象観測	坂田太市	南林教官			
林学通論	吉田正男	東大農・林			02/01-02
熱帯林業汎論	三浦伊八郎	東大農・林	06/01-05	01/26-29	10/31-11/02
南方林業の現況	森　三郎ロ)	日本合板協会理事			
日本林業の基調	徳川宗敬	東大農・林			
熱帯林業経営学	仁瓶平二ロ)	大東亜省技師			
造林学，樹芸学	中村賢太郎	東大農・林	06/18-23	03/22-26	
南方の樹芸	小田　脩ロ)	大東亜省技師			
森林土木学	西垣晋作	東大農・林		03/02-22	
機械，伐木，造材，集材，運材	藤林　誠	林試技師	08/23-09/05		11/28-12/02
農林土木	加藤誠平				11/23-27
南方の木材	杉浦庸一	林試技師	08/18-23	01/31-02/04	
？	北原覺一	東大農・林			02/26-28
製材および合板	森　三郎	日本合板協会理事			
熱帯林産製造学，製炭実習	芝本武夫	東大農・林	-07/18		
木材パルプ	右田伸彦	東大農・林	09/16-20		
熱帯農業汎論	佐々木　喬	東大農・農	10/？	05/19-21	
農業栽培原論	野口彌吉	東大農・農			
南方の農業	鮫島清彦	大東亜省技師			
熱帯作物	長戸一雄ハ)	東大農・農			01/12-14
南方の果実	宮田長次郎	帝国森林会技師長	?-07/12	05/04-06	
農芸化学，農産加工学	藪田貞次郎	東大農・農化			
農業製造学	住木諭介	東大農・農化			11/04-08
熱帯農業土木	田中貞次ニ)	東大農・農工		-06/15	
熱帯水産学	雨宮育作	東大農・水			
南方水産学	檜山義夫	東大農・水			01/10-12
マライ語	山崎直邦		07/12-24,09/11-16		
？　語	加藤長治郎				12/04-06
鍛錬体操	西林俊剛	千葉医大			
南方の衛生	志村芳雄		10/17-18	06/01-04	
衛生	栗本東一				01/13-14

イ) 1916 東大林卒，ロ) 1908 東大林卒，ハ) 1932 東大農卒，ニ) 1914 東大農卒

表の講義期間は，芳名録の記録によった。各講師が，必ず記帳したわけではないので，空欄＝講義なしを意味しない。講義課目名は上記資料によったが，芳名録に講師自身の記載がある場合は，それを優先した。

講師としてほかに，加藤　某（南方開拓の技術），萩原　某（南方森林の開発状況），永田龍之助（課目名不明）をあげた資料[7)]があるが，詳細不明である。

講義のテキストは，各訓錬生に貸与されたようで，千演天津事務所に複数冊ある下記の書籍は，その名残りと思われる。

中村賢太郎(1942)：造林學隨想，188p., 西ヶ原刊行会，東京
小田　脩(1941)：南洋農業讀本，216p., 中興館，東京
小田　脩(1944)：護謨栽培，247p., 成美堂，東京
武宮正一(1942)：馬來語辭典（南方調査會監修),1074p., 旺文社，東京
田中長三郎(1943)：南方植産資源論，301p., 養賢堂，東京

講師のひとり中村賢太郎教授は，南林第一期生と第二期生に対し各一回ずつ，造林学，樹芸学の集中講義，実習を行った。各回の日程をＮメモにもとづき以下にしめす。

『南林第一期』１９４３／Ｓ１８年6月

6/18（金）雨強，終日降る

講義：8-10,$10\frac{1}{4}$-$11\frac{3}{4}$,$13\frac{1}{2}$-15ｼﾞ『環境』，(おやつ；ゆであずき，夜；汁粉，清澄泊)

6/19（土）曇

講義：8-$9\frac{3}{4}$,10-$11\frac{3}{4}$ｼﾞ『育種』，見学：午後，郷台方面へ，(郷台泊，大東亜省事務官来泊)

6/20（日）曇，一時雨

(朝，東大鍛錬体操)，見学：$7\frac{1}{2}$ｼﾞ出発，四郎治経由小仁田（ｱﾌﾞﾗｷﾞﾘ,ﾂｹﾞ d.14cmの説明)，帰途降雨，瀧ノ沢　林道を急ぐ，$11\frac{3}{4}$-$13\frac{1}{2}$ ｼﾞ郷台（汁粉，鶏肉ほか），山椒沢経由$15\frac{3}{4}$ ｼﾞ清澄着，(同行，佐藤　修，小林，若月)，(清澄泊)

6/21（月）曇，冷気

講義：8-$9\frac{3}{4}$ｼﾞ『造林不成績地問題』，10-$11\frac{3}{4}$ｼﾞ『森林撫育』，見学：13-15ｼﾞ大見山内国樹種見本林（とくにﾂｹﾞ)，間伐実習予定地（同行，山口)，(清澄泊)

6/22（火）曇，冷気

見学：8-11ｼﾞ檜ノ台，南沢，武者戸，11-12ｼﾞ『質疑』，12-13ｼﾞ小屋ヶ尾（昼食)，実習：14-$16\frac{3}{4}$ｼﾞ『間伐』(200本，大見山下)，剥皮など（同行，高原)，(清澄泊)

6/23（水）晴，冷気

講義：8-12ｼﾞ『繁殖』，($14\frac{1}{2}$ｼﾞ天津発帰京)

この回，中村は6/13に来演，講義開始まえに，中村得太郎助手の試験地設定の立ち合い，各種試験地の視察，郷田倉の海軍用供出材伐採の見分などを行った。また6/14夜には，測量を講義中の荻原助教授や，日出平錬成主任と会合，授業につき打ち合わせたようである。

『南林第二期』１９４４／Ｓ１９年３月

3/21（火）晴，冷気（残雪あり）

10:50 両国発（超満員），14:31 天津着，清澄へ（西垣博士）

3/22（水）晴，冷気，南で雷鳴

講義：8-$9\frac{3}{4}$,10-$11\frac{3}{4}$ｼﾞ『環境』，実習・見学：13-16ｼﾞ『地拵』（桜ヶ尾），（夜，豚肉ｽｷﾔｷ会，高原，日出平，芝崎氏）

3/23（木）曇のち晴，冷気

講義：8-$9\frac{3}{4}$,10-$11\frac{3}{4}$ｼﾞ『？』，農作業：13-$16\frac{1}{2}$ｼﾞ『錬成所畑』（四方木，芝崎氏）

3/24（金）晴，冷気，夕方曇，風強くなる

講義：午前『造林，撫育（間伐）』，実習：午後『地拵』（桜ヶ尾），（従来毎日の入浴，今回から隔日となる。鰯，副食に魚は１ヶ月ぶりとか）

3/25（土）晴，一時曇，冷気

（朝，副食に,さざえ），見学：8ｼﾞ発，南沢，七曲，10ｼﾞ 小屋ヶ尾，武者戸，11-$11\frac{1}{2}$ｼﾞ 檜ノ台試験地調査，12ｼﾞ 清澄帰着，実習：$13\frac{1}{2}$ｼﾞ発，14-$16\frac{1}{2}$ｼﾞ『間伐』（大見山下，選木済），17ｼﾞ 清澄帰着

3/26（日）晴，冷気

講義：8-$9\frac{3}{4}$,10-$11\frac{1}{2}$ｼﾞ『？』，（13ｼﾞ 清澄発，14:31 天津発帰京）

両回とも短いメモのなかに食物の記載がある。また農作業，入浴のことなど，当時の日々切迫する食糧・燃料事情が偲ばれる。第二期生へ講義の時期，すでに『南林』廃止がきまっていた。中村は『南拓第一期』での講義は行わなかったようである。

上記，Ｎメモにあるように，訓錬生は造林作業の実習を行った。そこで施業沿革史から南林，南拓関係と特定できる記載事項を拾いだすと，表４２のようになる。

Ｎメモのうち，施業沿革史に明確な記載があるのは，１９４４年３月の間伐だけである。したがって表４２以外にも，南林，南拓の訓錬生による作業が，多数あったと思われる。

また，芝本武夫助教授の製炭実習では，千演佐藤　修嘱託，鴇田敏夫氏の指導のもと，訓錬生は一般的な製炭を行うとともに，以下の実験にも参加した[3]。

表４２　南林(R)·南拓(T) 関連の作業記録

年／月	期	林／小班	内容
1943/08	R1	42k	下刈,S17植ｽｷﾞほか,0.97 ha
1943/08	R1	43a	下刈,S18植ｽｷﾞ,ﾋﾉｷ,0.23 ha
		i	同,　同,　0.73 ha
1943/08	R1	44h	下刈,S16植ﾋﾉｷ,　0.07 ha
		i	同,S16植ｽｷﾞ,　0.36 ha
1944/02	R2	40j	製炭用材,32.63m³　0.37 ha
1944/03	R2	42e	間伐,M37植ｽｷﾞ,500本
1944/04	R2	36h	菖蒲沢造林地改良試験地手入れ
1944/04	R2	45c	植えつけ,ｽｷﾞ 304本, 試験地
1944/10	T1	42c	間伐, M35-38植ｽｷﾞ,0.04 ha ｽｷﾞ69本,ﾋﾉｷ16本,3.08m³
1945/05	T2	45d	間伐

南林第一期：仁ノ沢に三浦標準黒炭窯と清澄Ｇ式黒炭窯の各８尺窯を築き，両者の比較をした。実験は１９４３年９月～１１月の期間に５回にわたった。なお第一期生の修了は１０月末なので，終わりまでは参加できなかったと思われる。

南林第二期：今澄に10尺の清澄Ｇ式黒炭窯を築き，製炭試験を行った。期間は１９４４年３月～５月で，試験は５回にわたった。

なお，南拓第一期訓練生は，三浦伊八郎教授の指導で，松根油乾留試験に参加した。

そのほか，南林第二期生は２週間，南拓第一期生は10日間，勝浦の旭造船所で，それぞれ勤労作業を行った。

（５）おわりに

最初に述べたように，南林，南拓関係の資料は，演習林にほとんど残されていない。往復文書綴にみられるのも，以下の関連文書くらいである。

１９４３年１１月，文部省総務局長から総長あて，ついで千葉県内政部長から千演林長あて，『官庁用自動車ノ回収ニ関スル件』の照会があった。緊急必要以外の自動車は他へ転用，もしくは屑鉄として活用したいとの趣旨である。当時，千演に乗用車が1台あったが，「木炭瓦斯研究ニ供試スルト共ニ林學科教官，南方林業要員錬成所講師等乗車使用頻繁ニシテ当演習林ノ業務遂行上絶対的必要ナリ」と回答している CS18/11/24[C160]。

『南拓』の西林教官と補助教官（南林第二期修了者）の身分は，いずれも青年文化

協会の業務嘱託であった。入営または応召による以下の退職記録が，往復文書綴に残されている。佐伯慶一→金沢58部隊[CS20/03/24]，西林敏彦→東部第13326 部隊[CS20/04/01]，飯塚鐐二→東海25部隊[CS20/04/16]，田口義夫→東部第36部隊[CS20/06/06]，峯泰夫→東北75部隊[CS20/06/19]。

南拓訓錬生は，海軍航空輸送本部関係の製炭に協力し 221俵を生産した。敗戦時，未輸送分71俵が千演に残されており，千演では引き取り方を督促している[CS20/08/16]。

南林，南拓関係の資料は，以上のような状況で，ここでは不完全で断片的な記述となった。

１９７６／Ｓ５１年に南林，南拓修了者を中心に，関係者の懇親を目的とした『清澄会』が結成された。会誌『清澄』が発行されており，同誌には，修了直後の勤務先，勤務状況，関係者の回顧談，近況など貴重な資料が少なくない。また，佐藤　修(1995): 千葉演の思い出，演習林 **33**:57-103に，同氏が教官として訓練にかかわった当時の思い出の一章がある。

引用文献

1）浅田頼重(1983): 帝国森林会史，379p.,帝国森林会，東京

2）馬場萬夫監修(1943): 戦時下日本文化團體事典，第３巻,702+ 16p., 日本文化中央聯盟，東京（1990, 復刻，大空社）

3）芝本武夫(1944): 清澄Ｇ式黒炭窯と其の操作法，山林 **743**:10-27

4）東京大学百年史編集委員会(1985): 東京大学百年史，通史 2: 717-724,東大出版会，東京

5）東京大学百年史編集委員会(1987): 東京大学百年史, 部局史（農学部抜刷):95-96, 東大出版会，東京

6）東京大学広報委員会(1988): 学内広報,**783**,**795**

7）山中寅文編(1985): 清澄（清澄会会誌） **9**,38p.+

8）Anon.(1943):南方林業要員募集要綱，山林 **725**:87-88

9）Anon.(1943):帝國森林會の南方事業，山林 **727**:68

10）Anon.(1943):南方林業要員錬成所開かる，山林 **728**:94-95

11）Anon.(1943):南方林業要員訓練，山林 **732**:53

12）Anon.(1944):南方林業要員錬成員入所，山林 **734**:9

Ⅵ－３　君津農林学校報国隊

（１）学徒報国隊

１９４３／Ｓ１８年５月，国民勤労報国協力令が改正され，中等学校以上では『学徒勤労報国隊』として，男子は農村や工場の勤労奉仕，女子は幼稚園，託児所，保育所への協力に，かりだされることが多くなった。ことに１９４４年春，決戦非常措置要綱にもとづく学徒動員実施要綱が閣議決定されてからは，地域，学校，学年による差はあったが，中等学校生徒は男女とも，全面的に軍需工場などに動員され，勉学は放棄に近い状態となる。

（２）動員の発令

千葉演習林にも，１９４５年春から夏までの期間，千葉県立君津農林学校（現君津農林高等学校）生徒が動員された。生徒受け入れまでの経緯は不明であるが，同年４月１５日付，千葉県知事から農林学校長あて，下記のように出動が発令された（原文は縦書き，手書き記入部分に正字，略字の混用が多い）CS20/04/15。

學校報國隊出動令書

千葉縣立君津農林學校長　栗山圓次

右ノ者左ノ事項ニ依リ學校報國隊ヲ編成シ之ニ依ル協力ニ關シ必要ナル措置ヲ為スベシ

[隊ノ名稱] 君津農林學校報國隊

[出動セシムベキ員数] 男二〇人

[隊ノ出頭スベキ日時及場所] 昭和二十年四月二十日午前八時，千葉県安房郡天津町東京帝国大学農学部附属千葉県演習林

[出動申請者] 千葉縣安房郡天津町東京帝国大学助教授，高原末基

[作業指導者ノ職氏名] 助教授，高原末基

[作業場ノ所在地及名稱] 千葉縣安房郡天津町，東京帝国大学農学部附属千葉縣演習林

[作業ノ内容] 軍需用木材乾溜実験，工業用木炭製作，林学実習補助

[出動期間] 自昭和二十年四月二十日至昭和二十一年三月三十一日

[報償] 月給二五円

[災害，疾病，死亡等ニ對スル扶助ノ内容] 勤労学徒受入側措置要綱ニ依ル

[宿舎，保健，衛生，救護施設] 寄宿舎へ収容，食費演習林負擔ノコト

[其ノ他參考トナルベキ事項] 作業時間：午前八時始業，午後五時終業（休憩時間一時間）

昭和二十年四月十五日　　千葉縣知事　川村秀文

（3）配置と作業内容

動員生徒は名簿の生年月日から第五学年と思われる。毎月第一と第三木曜は出校日，報償金は月末に，一括学校長あて送金された。

生徒の各作業所への配置（表４３），作業状況等について，高原から栗山への月例報告にもとづき，以下にまとめる[CS20/05/11[C38],06/04,07/06[C69],08/27[C92]]。

表４３　各作業所への配置人数

作業所	４月	５月	６月	７月	８月
清澄	6	10	7	7	7
札郷	10	6	6	6	5
郷台	4	4	4	4	5
計	20	20[イ]	17[ロ]	17	17[ハ]

[イ]　５月６日，変更
[ロ]　同２２日，学校長要請で3名を動員解除
[ハ]　７月２０日，変更

なお６月には，17名中14名が農繁期の帰省をした。期間は，６月３日～２３日の20日間としたが，さらに10日ほど延長の生徒が多かった[CS20/06/04, 07/06[C69]]。

つぎに作業内容を分類してしめす。

『造林』

４／５月：［植樹造林］地拵え，新植，補植(ｽｷﾞ,ﾋﾉｷ,ｶｼ,ﾏﾂ,ﾓﾐなど)［苗圃］耕耘，播種，床替え，各種手入れ，開墾

６月：［植樹造林］地拵え，新植，補植，［苗圃］空畑の除草，耕耘

７／８月：［造林地］下刈り，除伐，［苗圃］床替え床の除草，圃場手入れ

『利用』

５月：木炭運搬

６月：［製炭］炭材伐採から出炭俵装

７／８月：［製炭］炭材伐採，集材，［醋酸石灰製造］器械の整備，整理など

『土木』

４月：［林道修繕］路面ならし，崩壊土砂取り片付け

５月：［林道修繕］路面ならし，崩壊土砂取り片付け，側溝浚渫，敷木，橋梁修理，

［雑］道具手入れ，畚(モッコ)作り

6月：［林道修繕］路面ならし，崩壊土砂取り片付け，［雑］道具手入，畚作り

7／8月：［林道修繕］路面ならし，崩壊土砂取り片付け，土橋改修・掛け替え，仮小屋手入れ改修

『試験』

4月：［椎茸培養］原木伐採，榾木調製

5月：［椎茸培養］榾木接種，榾木手入れ，［松根乾溜］松根油採取研究のための築窯2基，1基につき操作1回

6月：［木材乾溜］操作，［松根乾溜］築窯，操作

7／8月：［松根乾溜］築窯，資材準備

『調査』

5月：菊芋栽培調査，林間農耕調査，立木材積調査

6月：混農造林調査，収穫調査（材積），林内水田水稲栽培調査

7／8月：薪炭林，人工林材積調査

『雑』

4月：実習用水田耕作補助

5月：製茶，藁縄・藁草履作り

6月：休閑地及林地利用の農耕作業，藁縄・藁草履作り，各種道具手入れ

7／8月：林内開墾，農作物播種，除草，追肥，藁縄・藁草履作り，各種道具手入れ

（4）動員の解除

学徒報国隊の動員期間は，当初1年間の予定であったが，高原から千葉県知事斎藤亮あて，8月5日かぎりでの動員解除が申請された[CS20/08/06]。動員により演習林事業関係が大いに進捗したとの理由である。

しかし，動員の継続を困難にする諸事情があったと考えられる。ひとつは表44にしめす食料事情の急激な悪化である。つぎに動員期間は通算108日であるが，農繁期帰省や月2回の出校で，実働は70日間台の生徒が多かった。さらに交通事情の悪化で出校には足掛け3日を要する状況にあった。また作業内容が，軍需工場などにくらべ地味で，勤労意欲にひびいたと思われる。

表44　主食配給量　g／人／日　(1945)

月／日	基本	加配
〜06/30	400	116
07/01 〜07/10	400	102
07/11 〜07/31	360	102
08/01 〜	360	0

君津農林高等学校史[1]には，当時の校長の栗山圓次氏や卒業生の勤労動員についての回想がある。栗山氏は動員直後の１９４５年５月２５日に退職，前節記述の『南方開拓技術員養成所』舎監に就任したので，千演で生徒に接することもあったと思われる。上記同校史には，勤労動員先のひとつとして千演名があげられているが，作業内容などの具体的な記述はない。

千演では，１９３８／Ｓ１３年と１９３９年には，東京高等学校(旧制)[CS13/06/27 [H213],CS14/06/13]の，１９４１年には本学農学部紫友会鍛錬部学生団[CS16/06/20]の勤労奉仕を受け入れている。いずれも学校あるいは団体の自発的な意志によるものである。本節の『学徒勤労報国隊』は，これらと質的に異なる強制的なものであった。

引用文献

1) 千葉県立君津農林高等学校校史編纂委員会編(1978)：六十年の歩み，604p.,創立六十周年記念会

Ⅵ－4　陸軍部隊の駐留

１９４５／Ｓ２０年５月２８日，陸軍護北二二四五六部隊（角楚部隊）綱本隊隊長陸軍中尉綱本正敏から，札郷寄宿舎二棟の借用申し出があった。同隊は，黄和田畑地区に駐留割り当てを受けたが，同地区の収容能力不足のため，約半数の90名を翌日から札郷へ宿泊させたいとの要望であった。突然で，使用期間も不明であったが，当時の戦況から千演では寄宿舎の使用を了承せざるをえなかった[CS20/05/29[C52]]。札郷寄宿舎には，君津農林学校報国隊の生徒６名が宿泊していたはずだが，千演として異議申し立てを行えるほどの事情はなかったと思われる。

６月５日付，以下のような寄宿舎使用許可願が提出された[CS20/06/09[C55]]（原文は縦書き）。

昭和二十年六月五日　　護北二二四五六部隊長

東京帝國大學總長　内田祥三　殿

寄宿舎使用ニ関スル件

今般当部隊ニ於テ緊急軍事上ノ必要相生ジ候ニ付兵員収容ノ為貴學千葉縣演習林札郷學生寄宿舎ノ二棟ヲ当分ノ間使用方御許可相成度此段及照會候也

追テ使用期間ニ就テハ兵員撤収ト同時ニ返済可仕ニ付申添候

7月2日付で寄宿舎使用を総長了承。しかし，7月5日に綱本隊は札郷を撤収，長者町（現在の岬町の一部）方面へ移動した[CS20/07/25[C75]]。同隊の庶務責任者と思われる相澤准尉から千演林長にあてた，下記の葉書が残されている（原文は縦書き）。

拝啓　五月廿九日当隊駐留に際し札郷演習林宿舎借用中の處七月五日其の兵員撤収せるを以つて宿舎返却致し候間御承知相成り度，出立突然にて当日電話申し上ぐ可候處不通にて失禮仕り候間悪からず御諒承被下度候，尚駐留間は公私共に多大の御援助を賜り厚く御禮申し上げ候

程遠からぬ新任地なれば今後共宜敷御願申上候，時下氣候不順の折呉々も御自愛之程を先は御禮旁々御一報迄斯之如御座候，頓首

駐留は，沖縄戦末期から終結のころである。この部隊は，本土作戦用として１９４５年４月１５日，千葉市で編成を了えた第五十二軍に属した。『護北』とあるように，在北海道（旭川）第一次兵備兵団の百四十七師団所属で，４月末には編成の大部分を終えたが，本州への輸送に日数を要し，主力の房総進出は５月末であった。同師団は第一総軍（本土東方部分を防衛），第十二方面軍（本部：東京），第五十二軍（九十九里方面守備）に属する。

当時，九十九里浜は米軍による本土上陸の第一候補地とされ，同地の海岸付近の地況から，水際作戦は不利と考えられた。百四十七師団の守備範囲は，長生，夷隅，市原，君津郡にわたり，茂原，本納，大網あたりの，やや内陸を防衛線に想定していた。

しかし，敗戦間際に発想の転換があり，本土作戦では内陸における持久作戦を，いっさい考えない方針になった[1)]。これにより同師団の防衛線は，一宮から勝浦付近までの海岸線に変更された。綱本隊の移動は，上記の方針変更に対応すると思われる。

短いとはいえ 1ヶ月余のあいだ，綱本隊が札郷でなにをしていたかを知る資料は見当たらない。当時，食糧事情などが極度に逼迫し，各部隊は自活や援農に努力していた。たとえば長生郡方面では，護北部隊の兵士が製炭に従事したとの記録がある。

１９４５年６月における第五十二軍の自活実績は，主食（代用）324 町歩作付予定，豆類６町歩作付完了，牛19，豚 158，鶏 928，兎32飼育，木炭2,582 俵，薪 706石生産，薬草１町歩作付完了とある[1]。

綱本隊も，そうした努力中であったと思われる。

引用文献

1）防衛庁防衛研修所戦史室(1971): 本土決戦準備（１）関東の防衛（戦史叢書51)，朝雲新聞社，東京